

朝鮮通信使と徳山

はじめに

今年四月二八日から六月三日にかけて、『「こころの交流・朝鮮通信使」―江戸時代から二二世紀へのメッセージ―』展が京都文化博物館に於いて開催された。同展覧会は会場を福岡に移し、六月一〇日から七月一五日にかけて福岡県立美術館でも開催された。

また、同展に合わせたように、NHK人間講座「朝鮮通信使」が四月四日から五月三〇日にかけて全九回、京都造形芸術大学教授仲尾宏先生による講義が放映された。

一方、私事で恐縮ですが、萩国際大学で演習のテキストとして申維翰著述『海游録』を使用し、学生と共に

萩国際大学教授 小山良昌

に朝鮮通信使について学んでいるところです。この『海游録』は、享保四年（一七一九）將軍吉宗の襲職を祝賀するために派遣された「朝鮮通信使」の製述官である申氏が記述した旅行記録で、江戸時代中期のわが国内事情を知る好資料となっている。

当時徳川幕府の対外政策は、一般的には外国との国交を閉ざした「鎖国」政策と称されているが、実際は通商の国として中国の清とオランダ国とは交易し、通信の国即ち信（よしみ）を通ずる国として朝鮮国・琉球国（慶賀使・報恩使を派遣）と交わっていた。「朝鮮通信使」の通信とは、善隣友好關係を示す言葉であった。

一、「朝鮮通信使」前史

わが国と朝鮮半島との通航・交易は古くは古代に遡り、朝鮮半島からの文物の移入がわが国の文化をはじめあらゆる面で大きな影響を及ぼしたことは、広く知られた所であるが、特に室町時代には、足利將軍は積極的な対朝鮮政策を展開した。また、西日本の有力大名も独自の朝鮮交易を進め、中には大内氏のように始祖は百済の琳聖太子につらなるという伝承を持ち出して、積極的に交易を求める大名も現れた。

参考までに、日本国から朝鮮国への使者の派遣状況は、一三七七年から一五八九年までに七一回、朝鮮国から日本へ使者の派遣は、一三六七年から一五九〇年までに二三回を数える。（「朝鮮通信使—NHK人間講座」より）

その後、豊臣秀吉による朝鮮国への侵略戦争である文祿・慶長の役（一五九二—一五九八）（朝鮮国では「壬辰・丁酉倭乱」と称する）が行われ、日朝両国の関係は極端に悪化した。その両国の険悪な状態の関係

改善を積極的に図ったのが対馬の宗氏であった。従来、日朝関係は対馬の宗氏を経由して行われることが多くしたがって、李氏朝鮮側も嘉吉三年（一四四三）には宗氏との間に癸亥約条を結び、毎年歳賜米豆二〇〇石を与え、宗氏の歳遣船を毎年五〇隻と定めるなど、各種の優遇措置を与えていた。にもかかわらず、文祿・慶長の役に際して秀吉の朝鮮侵略の案内役を務めた宗氏に対し、李氏朝鮮側は厳しく対処した。

そのような日朝関係の狭間であって、いち早く日朝両国の関係改善に向けた宗氏の対朝鮮交渉は困難を極め、再三にわたる死力を尽くした和平交渉により、慶長九年（一六〇四）戦後初めて朝鮮からの使者僧惟政（松雲大師）ら探賊使を迎え、ここに国交回復の基礎が築かれた。（「朝鮮通信使—NHK人間講座」より）

文祿・慶長の役後、比較的早期に国交再開がなされた背景には、勿論対馬藩の積極的な動きもあるが、関ヶ原での東西対決に勝利を治め新政権を樹立した徳川家康の強い意向も見逃せない。新政権に外国である朝

表① 江戸時代の朝鮮通信使

西暦	年		干支	正使	副使	従事官	製述官	総人員 (大阪留)	使命	使節関係の記録 および編纂物	備考
	朝鮮	日本									
一六〇七	宣祖四〇	慶長一二	丁未	呂祐吉	慶暹	丁好寛		四六七	修好 回答兼刷還	海槎録(慶暹)	国交回復
一六一七	光海君九 元和三		丁巳	吳允謙	朴梓	李景稷		四二八 (七八)	大坂平定祝賀 回答兼刷還	扶桑録(李景稷) 東槎上日録(吳允謙)	伏見行札
一六二四	仁祖二 寬永元		甲子	鄭岷	姜弘重	辛啓榮		三〇〇	家光襲職祝賀 回答兼刷還	東槎録(姜弘重)	
一六三六	仁祖一四 寬永一三		丙子	任統	金世濂	黄屎	権 伏	四七五	泰平祝賀	丙子日本日記(任統) 海槎録(金世濂) 東槎録(黄屎)	以降「通信使」と称す 日本国大君号制定 日光山遊覽
一六四三	仁祖二一 寬永二〇		癸未	尹順之	趙 綱	申濡	朴安期	四六一	家網誕生祝賀 日光山致祭	海槎録(申濡) 東槎録(趙綱) 癸未東槎日記	東照社致祭
一六五五	孝宗六 明曆元		乙未	趙珩	俞 瑒	南竜翼		四八八 (一〇三)	家網襲職祝賀 日光山致祭	東槎録(南竜翼)	東照宮拝礼および 大猷院致祭
一六八二	肅宗八 天和二		壬戌	尹趾完	李彦綱	朴慶俊	成 琬	四七五 (一一二)	網吉襲職祝賀	東槎日録(金指南) 東槎録(洪禹載)	
一七一	肅宗三七 正徳元		辛卯	趙泰億	任守幹	李邦彦	李 瓚	五〇〇 (一二九)	家宜襲職祝賀	東槎録(金頭門)	新井白石の改革
一七一九	肅宗四五 享保四		己亥	洪致中	黄 瑒	李明彦	申維翰	四七五 (一〇九)	吉宗襲職祝賀	海槎日録(洪致中) 海游録(申維翰) 扶桑紀行(鄭后僑)	
一七四八	英祖二四 寬延元		戊辰	洪啓禧	南泰耆	曹命采	朴敬行	四七五 (八三)	家重襲職祝賀	日本日記 奉使日本時間見録(曹 蘭谷)	
一七六四	英祖四〇 明和元		甲申	趙 曦	李仁培	金相翊	南 玉	四七二 (一〇六)	家治襲職祝賀	海槎日記(趙曦)	崔天宗殺害事件
一八一	純祖一一 文化八		辛未	金履喬	李勉求		李顯相	三三六	家齊襲職祝賀		対馬聘札

田中健夫「朝鮮の通信使」より引用

鮮国からの賓客を招く政治的な意図があったことは想像に難くない。徳川家康は、自らは文禄・慶長の役に際して朝鮮出兵をしなかったことを強調して、対馬藩に朝鮮国との国交回復を積極的に進めるように要請させている。

一方、朝鮮国の立場で言えば、一方的な戦争を仕掛けられ、多くの犠牲者と国土の荒廃をもたらした日本国であるが、この倭乱で多くの被虜人が日本に連れ去られており、その捕虜の送還（刷還と表記）と、徳川家康からの国書に対する回答国書の伝命、および日本国内の賊情探索を目的として、日本への使節団の派遣を実施することになった。表①に示すように、第一回から第三回までは回答兼刷還を使命とした。

二、「朝鮮通信使」の概要

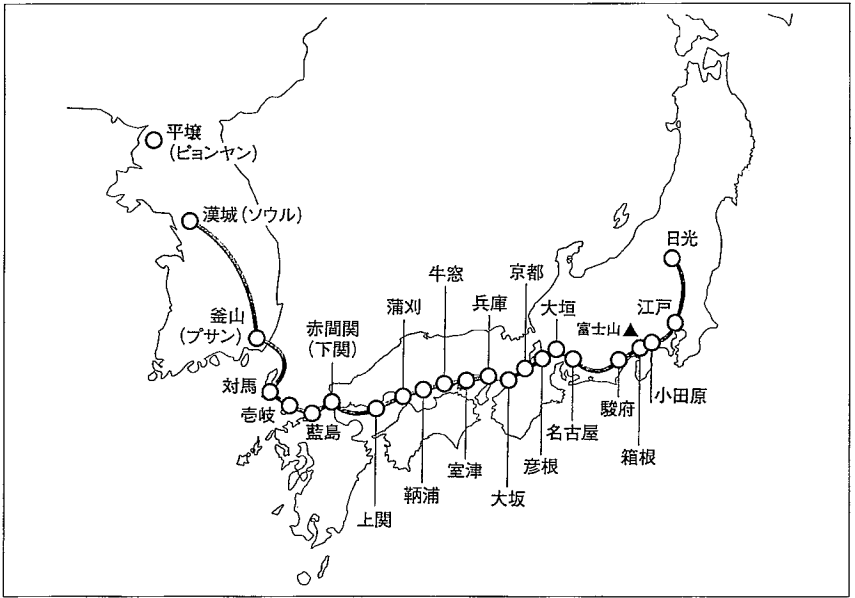
江戸時代における朝鮮通信使の来日は、回答使の時期を含めて文化八年（一八一―）までに二二回実施されている。明暦元年（一六八二）以降は「御代替祝儀

の信使」とも表現され、將軍職襲職の度に派遣された。（表①参照）

朝鮮通信使一行は当代一級人を中心に編成され、その規模は、正使、副使、従事官の三使をトップとして、画員、医員、訳官、楽士など上々官、上判事、学士（製述官）から下官まで総勢四〇〇人から五〇〇人のぼる大使節団であった。

使節団一行の行程は、ソウル（漢城）を出発し、釜山からは六隻の外航船に乗って対馬―壱岐―藍島―赤間関―上関と瀬戸内海を経、大坂からは豪華絢爛の川御座船に乗り換えて淀川を遡り、伏見に上陸して琵琶湖南岸の朝鮮人街道―美濃路―東海道を経由して江戸に到着した。江戸では將軍に対面した後、帰路もほぼ往路と同一のルートを通航した。その間約半年、危険を冒す難儀な旅でもあった。（行程略図参照）

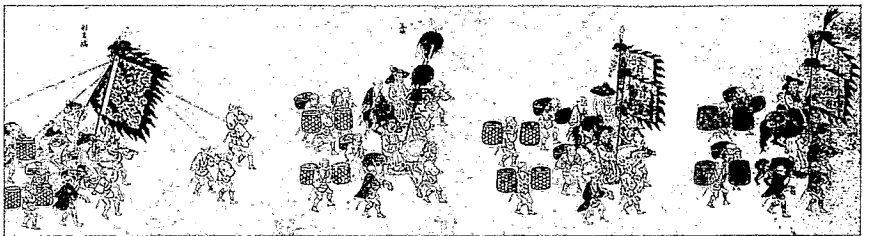
彼ら一行を迎える日本側の対応について、先ず対馬藩は藩主宗氏をはじめ藩士民八〇〇人を繰り出して、江戸までの往復を案内・護衛目的で同行した。それに



行程略図

加えて、通信使一行が通行する沿道・沿岸の各藩からは、相応の船団や藩士を派遣して遺漏の無いように対応した。参勤交代における最大行列は前田藩で、その数約二〇〇〇人とされているが、通信使の場合、案内・護衛役を含めて四八〇人前後を数え、その通行が如何に大規模であったかが想像される。今も各地に残る「朝鮮通信使行列絵巻」(写真①参照)によって、当時のきらびやかな行列風景を知ることができる。

(参考文献「海游録」「このころの交流朝鮮通信使」



写真① 朝鮮通信使行列絵巻 (特別展「朝鮮通信使」より)

「朝鮮通信使―NHK人間講座」など)

三、「朝鮮通信使」と毛利藩

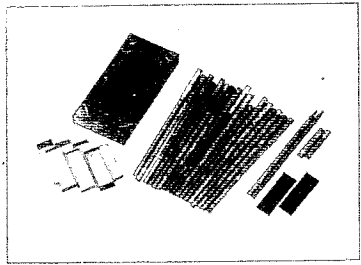
朝鮮通信使一行に対する毛利本藩の海上警備領域は、長門彦島から安芸蒲刈島までで、その間の迎接地として長府領内の赤間関と本藩領上関に客館が設けられた。赤間関の客館は阿弥陀寺、上関では御茶屋が当てられた。

赤間関・上関ともに城下町萩から遠く、したがって、長府藩・岩国吉川藩共に土民を多数動員した。結果的には防長両国挙げての接待となった。通信使一行の饗応・接待は、通信使の四・五〇〇人に加え、同行の対馬藩士民八〇〇人も含んでおり、しかも、これらの客館では比較的長逗留となったこともあって、長州藩は勿論、長府・岩国藩共に財政的負担は莫大なもので、藩財政を圧迫したことが推測される。長州藩が朝鮮通信使に対して如何に丁重にもてなしたかは、赤間関に到着した時の模様を描写した『海游録』によって知る

ことができる。

「一抱えもある木を数十、数百株と連ねて水中に挿して列べ、その上に白い板を鋪き、縦横それぞれ十余間、岸と平直にして寸分の高低もない。板上には浄席を敷き、まっすぐに使館にいたる。館宇は新築で、藍島(黒田藩の迎接処)のそれよりはやや狭いが、精妙なことはそれにまさる。金屏・繡帷・緑紗の蚊帳があり、楹外には紅氈を鋪き、銅の止め金でおさえている。その華麗なることかくの如くである」

県立山口博物館には、朝鮮通信使によってもたらされた三使から毛利家への贈品が所蔵されている。贈品目録によると、贈品の内容は朝鮮人参、色紙、真墨、黄毛筆、硯石、扇子、黒麻布、栢子(朝鮮松実)で、このうち朝鮮人参以外は全て残存している。墨で描かれた龍の模様から、これらの品々が李王朝関係の製作物であることが明らかで、將軍への贈品は当然として、將軍以外の大名への贈品は異例のことで、毛利家が如何に通信使を優待したかの証左であろう。これらの品

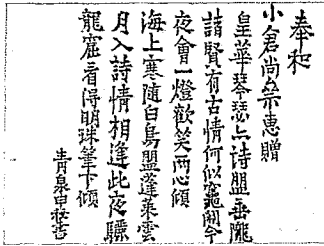


写真② 文房四宝のうち毛筆・硯・墨
 (「県立山口博物館研究報告」第18号より)

々は、現在国の重要文化財に指定されている。(写真②参照)

通信使の来日は、一方ではわが国文化人との交流の場となった。『海游録』によると、通信使一行が客館に到着すると、地元の学者・文人が朝鮮人学者の書を求

めて殺到する様を描写しているが、長州藩でも赤間関の公館では萩藩明倫館の学者や長府藩の学者・諸文人と詩文を酬唱し、なかんずく、明倫館学頭の小倉尚齋や教授山県周南の学識は激賞しており、互いに信を交え、長時間にわたって筆談



写真③ 小倉尚齋 韓客酬唱録
 (申維幹翰詩書)

た。なお、上関の御客屋でも岩国吉川領の学者と交流している。(写真③参照) (参考文献 下関市立長府博物館「朝鮮通信使」県立山口博物館研究報告第一八号)

四、「朝鮮通信使」と徳山藩

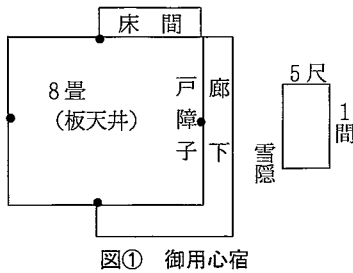
前述したように、通信使一行の迎接地は本藩領の赤間関と上関であったため、徳山藩は通信使の通行に全く無関係であったかといえれば必ずしもそうではない。徳山藩としての公務は、通信使一行の船団を見受けた場合、本藩三田尻沖向島の「狼煙」を受けて、野島一拾島ー下松深浦へと「狼煙」を上げて伝達することであった。

延享五年(一七四八)の通信使来朝を例に示すと、前年一二月本藩より狼煙について「旧例の如く狼煙の実施」が通達され、早速「稽古狼煙をするように」と命じられたので、野島狼煙役阿武藤右衛門、拾島狼煙役今津惣兵衛へ命じ、稽古狼煙を実施させた。その狼

煙場には両島とも狼煙番人が昼夜各三人宛勤務して見張り、庄屋にも時々巡回して注意させた。なお、狼煙に使用する材料の用意は松葉二〇〇把、柴五〇把、しらこ二〇把で、他に黒木一〇把の薪も用意され、松小竿一一本は狼煙場番小屋の入用品として用意された。

一方、雨天や濃霧などの気候・天候の状況によっては、狼煙が使用できないことも考えられた。そこで、万一の場合に備えて、「飛船一隻」による伝達も用意された。

また、通信使一行の航行中に天候不順などによる不測の事態も考慮され、給島に「上陸宿又は御用心宿」と称する宿泊施設が建設された。その規模は図①に示すように、床の間と外縁側を備えた八畳一間で、屋外には一間×五尺の雪隠を設けた簡単な作りであった。



通信使一行が徳山藩領内を航行の際は、新鮮な水を積んだ船一五隻と薪船一五隻が水薪を届けているが、徳山藩主からは別に進物として干菓子と串海鼠一箱が三使あてに贈られた。このことについて『海游録』は次のように描写している。

徳山、笠戸などの村を過ぎたところで、たちまち四、五人が小艇に棹さして来る。それぞれ小さい黒旗をたて、地名を白抜きに書き、水と菜魚を載せてきて進供した。「汝、いづれからの進物か」と問うと、「太守から命あり、使華の通過を待つてあえて従者の労をとる」と答えた。

とある。徳山藩主としては直接の接待役は免除されていたが、水と菜魚を贈呈して通信使の領内通過時には、それなりに配慮したと言う事であろう。

正徳元年（一七一）一月、通信使の船団が笠戸浦において、天候不順により一週間ばかり立ち往生する事態が発生した。前述したように、通信使一行が約五〇〇人、随員・警衛する対馬藩士民が約八〇〇人、そ

れだけでも一三〇〇人を超える大集団が、笠戸深浦のような寒村に突如長期に滞在する事態となつて、地元では大恐慌を来したであろう事は容易に想像される。以下に事態の推移を記す。

一月四日、天候不順により朝鮮への帰国中の通信使船団が笠戸浦に寄航し、一部の者は宮洲へ泊船したと藩府へ注進があつた。

一月五日、朝五ツ時過ぎには笠戸浦出港の予定である、下松より注進が入つてほつとしていたところ、天候が雨天になつたため船団が笠戸深浦へ引き返したと、九ツ時に注進が入つた。そして、船用の水を大島へ水汲にいったとの情報もたらされた。

一月六日、雪、晴天、大西風が吹き荒れた。

一月七日、大雪が積もつた。

一月八日、雪、大西風

一月九日、雪、西風

一月一〇日、雪、西風、長浜五郎三郎の報告による

と、昨晚宗対馬守様御医者者の井田忠庵が船頭を同道して下松浦の浦日代を訪ね、朝鮮人のうちに病人が出たので、薬種一五種を購入して早々に深浦へ届けて欲しいと依頼された。そこで、早速徳山町で薬種を購入し、約束どおり今朝日代源七が薬種を届ける予定である。

一月二日、降雪、晴、風なし

一月二日、晴天、今朝五ツ時過ぎに、通信使船および対馬藩船は深浦を出帆したが、下松から注進された。これらの船団は、梶島・馬島間を通航し、昼時には大津大泊を過ぎ、防府沖向島方面に向けて去つていった。

(参考文献 徳山毛利家文庫「御蔵本日記」)